

スーパービジョンにおける役割理論と あいまいな喪失理論の援用の可能性

——保健医療福祉領域における支援者支援のための検討——

大賀有記

はじめに

保健医療福祉領域においては、支援者のバーンアウトや離職が少なくはなく（井上ら 2015；中野 2007）、2014年の第6次医療法改正においても、支援者の勤務環境の改善や離職後の就労支援対策について取りあげられている（厚生労働省 2013）。2025年問題を見据え、国が目指す地域包括ケアシステムの整備のためには、支援者の力が必須であり、支援者の業務遂行を支援することは国民的課題といえる。

一方、支援者に期待される役割は時勢に合わせて変容し続けている（小原 2013；田中 2014）。その背景には、利用者の権利意識の向上や、質の高い医療の効率的提供、地域包括ケアを目指した国の施策に影響を受けた医療や福祉のシステムの変化などがある。とくに、地域完結型医療体制や地域包括ケア体制の整備が進むなか、医療機関のソーシャルワーカー（以下、ソーシャルワーカーとする）は、相談支援業務と同時に地域連携業務を担う一方、看護職等他職種とともに相談支援業務を行うといった変化に直面している現状がある。ソーシャルワーカーの業務の実体があいまい化しており、そこにソーシャルワーカーが戸惑いや困難、不安全感を抱くことも報告されている（大賀 2014ab；坂田ら 2009）。

期待される役割が変容し続け、不安定であいまいな状況にソーシャルワーカーが困難を感じていることを鑑みると、彼らの業務遂行を支援する必要は大きい。では、ソーシャルワーカー支援のためには、何を理論的基盤として対策を練っていったらよいのであろうか。役割の変化という事象に着目したとき、変化が常に喪失を伴う（Neimeyer=2006）ものであるならば、喪失の概念から手掛かりを得ることができるのではないだろうか。さらに、近年の支援者の役割のあいまい化現象（大賀

2014a）に着目すると、役割理論とあいまいな喪失理論が支援者支援に示唆を与えてくれるのではないだろうか。

本稿の目的は、支援者支援の代表例であるスーパービジョンに注目し、役割理論とあいまいな喪失理論を取り上げ、それらとスーパービジョンとの関連や援用可能性について検討することである。

1. 視点の枠組み

ここでは、役割の変化を体験している支援者、とくにソーシャルワーカーを支援するためにスーパービジョンの考え方を整理し、役割理論とあいまいな喪失理論について言及する。

1.1. スーパービジョン

スーパービジョンは支援者支援策の代表的な例である。スーパービジョンは、アメリカやイギリスにおいてはソーシャルワーク実践に必須なものと考えられており、1870年代にはイギリスで、また1890年代にはアメリカのCOS（慈善組織協会）活動でその萌芽がみられ、日本には1950年代初頭に導入されたとされる（山口ら 2008）。COSが生活困窮や傷病者の調査や救済機関の分業、救済の重複や不正受給の防止も行っていたことを鑑みると、当時のスーパービジョンは、COSが組織としてより有効に機能するために、職員である友愛訪問員の業務管理を行うという意味合いもあったのではないかと推察できる。

スーパービジョンの定義についてここで確認をしておきたい。ひとつに、実践力という専門職としての能力を養成するための訓練（Dessau 1970）としたものや、スーパーバイザーの成長と成熟を促す教育的援助の過程（仲村 1985）としたもの、業務遂行能力を向上させるため

の教育訓練（黒川 1992）といったような、教育的機能に重点を置いたものがある。その一方で、「管理、支持、教育という三機能を提供することにより実践家の社会化の過程を含む、専門職養成の過程」（福山 2005：197）といわれたり、「専門職の業務全般の遂行をバックアップするための職場の確認作業体制」（福山 2005：198）と表現されたりするなど、職場組織での業務遂行に関連させて説明しているものもある。

以上からスーパービジョンとは、組織に所属する専門職が、組織における自らの業務を行うことを支援する体制であると考えられることができる。

2. 役割理論

組織から業務を行うことを課された専門職の役割の今日の状況について、役割理論の観点から述べていきたい。

はじめに、役割（role）と機能（function）を別に示しておく。

機能とは、はたらきのことであり、例えば、ソーシャルワーカーの人と環境を調整する機能、人の対処能力を強化する機能、環境を修正・開発する機能（白澤 2010）などがあげられる。これは専門職性を担う専門職のはたらきであり、ある一定の状況においてこのはたらきが発揮されたとき役割となるといえる。

役割理論は、1900年代初頭の米国シカゴのスラム等の社会問題に関心を寄せていた社会心理学者 Mead（＝1974）が、社会問題の解決のために人の行為の持続が必要（山下 1997）として考え出された社会的自我論が発端とされている。つまり役割理論から人をとらえると、人は本質的に社会に能動的かつ持続的に働きかけ続ける存在であるといえる。

Mead の社会的自我論の考え方に加え、社会的相互作用の解釈過程に着目したシンボリック相互作用論（Blumer＝1991）や、社会構造の維持のために規範に応じた行動をとることを重視する機能主義理論（Parsons＝1974）等の考え方をふまえると、役割を以下のように定義することができる。役割とは、期待、社会的地位、規範、行為の4つの構成要素からなり、「個人の社会的地位との関係における、期待と規範に基づいた行為」（大賀 2014b：38）である。また行為は、意図性や目的指向性があるため、行動に至る思考を含み（Parsons et al. eds.＝1960）、心理システムの構成要素でもあり（Luhmann＝1995）、心理、社会的、文化的側面をもつ。ゆえに行為とは「意図性や目的指向性をもった行動とそれに関連する思考と感情からなり、それは心理・社会・文化的側面をもつもの」（大賀 2014b：37）といえる。

以上より役割を構成している要素は、期待、社会的地位、規範、行為の4点であり、かつ行為は、行動と思考と感情の3要素から構成されるシステムといえる。役割の4つの構成要素が揃ったうえで、行為として表すことができたとき、ソーシャルワーク専門職としての機能は役割になると考えることができる。

今日、利用者や組織、国の体制からの支援者への期待や、支援者自身の組織内の所属部署や、常勤であるか非常勤であるか等の社会的地位が変容し続けており、専門職としての規範と組織の規範との葛藤や倫理的ジレンマ（福山 2009）さえもあいまいになり、役割システム全体があいまいになっていると考えられることができる。

3. あいまいな喪失理論

特に支援者のバーンアウトの予防支援においては、彼らが何に悩み苦しんでいるのかについて、的確に捉えることが肝要となる。支援がうまくいかず悩んだり、気持ちが落ち込んだり、悲しみや怒りを感じたりする反応は、大切なものを失った際の悲嘆作業と類似している。では、彼らが仮に悲嘆作業をしているとするならば、彼らは役割を失ったと考えられるのだろうか。役割全体は失っていないと考えられるため、ここでは役割の一部を失ったととらえてみる。彼らが失ったのは、役割の構成要素のうち、利用者からの期待かもしれないし、専門職としての行為のうちの行動かもしれないし、また別の要素かもしれない。このような役割の部分喪失について、あいまいな喪失という観点から考えてみたい。

あいまいな喪失は、家族療法家である Boss（＝2005）により提唱された考え方であり、現在理論化されている（Boss＝2015）。従来、喪失とは、愛する人との死別に代表されるように、その人にとって大切なものが実体としてなくなったという概念（Bowlby＝1981；Harvey＝2002；Martin 2000）で語られることが多い。そして喪失体験をすると生活の変化を体験する。これは、喪失には変化が伴い、変化の体験には喪失体験が含まれている（Neimeyer＝2006）とする考え方を具現化しているといえよう。

一方 Boss（＝2005）は、行方不明の兵士を探す母親や、認知症のため次第に家族のことが認識できなくなってくる女性を介護する娘の悲しみなどに焦点を当て、前者を心理的に存在しているが身体的には存在していない状態、また後者を身体的に存在しているが心理的には存在していない状態として、両者をあいまいな喪失として説明した。そしてあいまいな喪失は自他ともに認めにくい現象であり、終わりのない未解決の悲しみをひきおこすが、人々はレジリエンスを高めることによってその不

安やストレスとともに生きることができると説明している。

これは、喪失には全体喪失と部分喪失があるとした考え方（福山 1997）にもつながっている。何を失ったのか明白であるとき、喪失にともなう悲嘆は、悲嘆している本人にも周囲の人にも理解しやすい。そしてその喪失の事実を自他ともに認め、新たな生活を構築していくプロセスを歩みやすい傾向がある。しかし、あいまいな喪失である場合、明白な喪失とは別の困難があり、さらなる研究が必要とされている（Boss=2015）。その一つに、両方のタイプのあいまいな喪失が同時に起きている場合があげられている。たとえば、家族という一つのシステムの中で、父親が転勤で家庭内におらず、母親がインターネットなどに夢中になりすぎて心が家庭から離れるという現象である。これは子どもたちにとって、父親が身体的に不在であるが心理的には存在しており、母親は心理的に不在であるが身体的には存在しているという、二つのタイプのあいまいな喪失を引き起こす。このような現象は子どもたちのネグレクトにもつながっていくおそれがあると指摘されており、社会的にも重大な課題となっている。本理論の前提は、「家族の中でも大切な人が肉体的にもはや存在しなくなっても、その人の家族を形作る社会的相互作用は継続していく」（Boss=2015：44）ことと記されている。

これをソーシャルワーカーの状況に当てはめて考えてみたい。ソーシャルワーカーが所属しているのは病院などの組織システムであり、組織の中での期待（役割の構成要素のうちのひとつ）などが変化しても、ソーシャルワーカー自身をめぐる社会的相互作用は継続していく。ゆえにあいまいな喪失理論は援用できるのではないかと考える。つまり「家族の中でも大切な人が肉体的にもはや存在しなくなっても」（Boss=2015：44）というところが「病院組織の中でソーシャルワーカーに向けられた期待の一部が実体としてもはや存在しなくなっても」と置きかえて考えることができるといえる。ただし、離職によりその組織から離れる場合は、失業という明白な喪失になり、あいまいな喪失理論は適応できない。では、三つのあいまいな喪失の例について示してみたい。

1) ソーシャルワーカーが身体的には存在しているが、心理的に存在していない場合

利用者や組織からソーシャルワーカーとしての期待に十分応えられていないことを認識しつつも、そこに毎日出勤するという場合（勤務先である組織に身体的には存在しているが心理的には存在していない）。

2) ソーシャルワーカーが心理的には存在しているが、身体的に存在していない場合

出向や非常勤という立場でその職場に勤務はしているが、現状勤務している職場に正式に籍を置いていない場合（現状の勤務先ではない本院に心理的には存在しているが、本院には身体的には存在していない）。

3) 二つのタイプのあいまいな喪失が生じている場合

利用者や組織からソーシャルワーカーとしての期待に十分応えられていないことを認識しつつも、そこに毎日出勤するという状況があり、かつ、出向や非常勤という立場でその職場に勤務はしているが、現状勤務している職場に正式に籍を置いていない場合。

II. 考 察

1. 役割理論とスーパービジョン

支援者支援とは、支援者の役割を支援することである。ゆえに役割理論からは、支援者支援を行う際に「役割」の、期待、社会的位置、規範、行為の4点のどれに着目して行えばよいのか、また「行為」の行動、思考、感情のどの側面に焦点を当てたらいいのか、検討することができるかと考える。

役割理論の考え方を基盤にスーパービジョンを表現するならば、つぎのようになると考える。——ある機関（組織）に専門職として業務を行うことを期待された個人が、その組織の一員という立場（社会的位置）で、専門職としてより質の高い業務遂行行為を継続的にとることを組織的に担保する体制である。——組織的に担保するということは、専門職は業務行為を通して組織に貢献し、組織は専門職の貢献を組織の運営に反映し、組織の社会的役割を果たすことであるといえる。

このような文脈で考えると、スーパービジョンは支援者支援体制の大きな位置を占めると考える。スーパービジョンには、管理、支持、教育の3つの機能があるとされるが、役割理論をふまえると特に管理機能を発揮することが有用であるといえるだろう。管理機能を発揮したとき、「役割」の、期待、社会的位置、規範、行為の4点のどれに着目してスーパービジョンを行うのがより有効か、また「行為」の行動、思考、感情のどの側面に焦点を当てたらより適切か、検討することができるだろう。感情から思考、思考から行動に至る過程には、管理機能だけではなく支持や教育機能も多分に入っている。スーパービジョンは、3つの機能の提供により、より質の高い専門職としての行為を支えることにつながる（福山 2005）と考えられている。そのため、役割理論の考え方をスーパービジョンに関連させ、援用することは有

用ではないだろうか。

2. あいまいな喪失と役割、およびスーパービジョン

先に示したあいまいな喪失の例から考えてみる。

利用者や組織からソーシャルワーカーとしての期待に十分応えられていないことを認識しつつも、そこに毎日出勤するという状態（勤務先に身体的には存在しているが心理的には存在していない）では、役割の構成要素のうち期待は喪失（変容）しているが、社会的位置は喪失していない。また規範も喪失していないので、期待に着目したスーパービジョンを通して専門職としての行為を取ることはできるだろう。支援者への期待が大きく変容し続ける今日においては、役割理論を援用し、特に期待と行為に着目したスーパービジョンは支援者支援に有用と考える。

一方、出向や非常勤という立場でその職場に勤務はしているが、現実に勤務している職場に正式に籍を置いていない場合（本院に心理的には存在しているが、本院には身体的には存在していない）であっても、利用者からの期待や専門職の規範を柱とした行為をとることは可能である。しかし、社会的位置が不安定であるため困難に陥りやすく専門職としての行為はとりにくいと考える。社会的位置は、役割を果たすために重要な意味をもたらす（福山 2012）。出向や非常勤といった社会的位置があいまいになりやすい場合、常勤職とは異なるスーパービジョン体制を考えることが必要であろう。職能団体が行うスーパービジョンの活用も有効と考えられるが、その場合、組織システムの様態やスーパービジョンの定義や意義、効用や限界について再度検討が必要であろう。あいまいな喪失理論は、システム構造があることが前提である。社会的位置が喪失（変容）した場合、システムの様態自体が変化してしまう。しかし離職したわけではないので、明白な役割喪失ではない。社会的位置の喪失は、理論的にも臨床的にもさらなる検討が必要であり、社会的位置の新たな概念が必要になると思われる。

そして、二つのタイプの喪失が同時に起きている場合は、より混乱をきたす。役割の構成要素の一つである社会的位置が不安定であり、そのために社会的位置との関係性における期待や規範が不明瞭となり、結果として行為も不安定になる。専門職としての規範は明確なものであるとしても、所属機関の規範はあいまいになりやすい。昨今の雇用情勢や経済情勢から鑑みると、非常勤や組織に縛られない自由な働き方をとする専門職は増えていく（田畑ら 2006）と予想される。Boss（=2015）が述べているように、あいまいな喪失、つまりここでは役割の部分喪失であるが、その場合の支援については、さら

なる検討をしていくことが今後の課題である。

おわりに

以上、保健医療福祉領域における支援者支援、とくにソーシャルワーカーに焦点を当てて、スーパービジョン、役割理論、あいまいな喪失理論の三つの視点から考察してきた。役割の構成要素のうち、社会的位置以外の喪失が生じているときは、役割理論とあいまいな喪失理論を援用しスーパービジョンを行うことが支援者支援に有用であることが示唆された。しかし、社会的位置が不安定である場合は、そのシステムの様態を再検討し、社会的位置の概念そのものを検討する必要があるといえる。また、役割の構成要素のうち複数を喪失しているソーシャルワーカーの状態については複雑であり、その苦しみやつらさはさらに深刻である。今後はこのような複数の要素の役割喪失状態に苦慮する支援者への支援について検討し、支援者支援を行う際に基盤となる理論体系について考察を深めていきたい。また、役割理論およびあいまいな喪失理論のスーパービジョンへの援用可能性についてさらなる理論的検討を重ね、実際のスーパービジョン体制に活かすことも今後の課題としたい。

文献

- Blumer, H. (1969) *Symbolic Interactionism Perspective and Method*, Prentice-Hall, Inc. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論——パースペクティブと方法』勁草書房.)
- Boss, P. (1999) *Ambiguous Loss—Learning to live with unresolved grief*, Harvard University Press. (=2005, 南山浩二訳『「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」——あいまいな喪失』学文社.)
- Boss, P. (2006) *Loss, Trauma & Resilience*, W. W. Norton & Company. (=2015, 中島聡美・石井千賀子監訳『あいまいな喪失とトラウマからの回復』誠信書房.)
- Bowlby, J. (1975) *Separation: anxiety and anger*, Penguin Books. (=1991, 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳『新版 母子関係の理論 II 分離不安』岩崎学術出版.)
- Dessau, D. (1970) 上野久子訳『ケースワーク・スーパービジョン』ミネルヴァ書房.
- 福山和女 (1997) 「第1章 喪失体験とソーシャルワーク」ルーテル学院大学編『ターミナルケアとグリーフワーク』5-12.
- 福山和女 (2005) 『ソーシャルワークのスーパービジョン——人の理解の探究』ミネルヴァ書房.
- 福山和女 (2009) 「第2章 相談援助の基盤と専門職 第3節 専門職倫理と倫理的ジレンマ」社団法人日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規, 31-36.
- 福山和女 (2012) 「支援者支援にみる喪失のあいまい化」『精神療法』38(4), 58-63.
- Harvey, J. H. (2000) *Give Sorrow Words: Perspectives on Loss and Trauma*, Taylor & Francis. (=2002, 安藤清志監訳『悲しみに言葉を——喪失とトラウマの心理学』誠信書房.)

- 井上由美・長見まき子・重田淳吾 (2015) 「医療・福祉職における専門職従事者のメンタルヘルスについて：バーニアウトの予防と対策」『大阪作業療法ジャーナル』28(2), 89-95.
- 黒川昭登 (1992) 『スーパービジョンの理論と実際』岩崎学術出版.
- 厚生労働省 (2013) 「医療法等改正法案 参考資料」(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r985200000350oy-att/2r985200000350tu.pdf>, 2015.6.27)
- Martin, T. L. and Doka, K. J. (2000) Chapter 2 Definitions, *Men don't cry ... women do: Transcending gender stereotypes of grief*, Brunner Mazel. 11-28.
- Mead, G. H. (1934) *Mind, self and society*, University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野取訳『現代社会学大系第10巻 精神・自我・社会』青木書店.)
- 中野加奈子 (2007) 「医療ソーシャルワークにおける『退院援助』の変遷と課題」『佛教大学大学院紀要』35, 221-234.
- 仲村優一ほか編 (1985) 『社会福祉方法論 講座II』誠信書房.
- Neimeyer, R. A. (2002) *Lessons of Loss: A Guide to Coping*, Center of the Study of Loss and Transition. (=2006, 鈴木剛子訳『〈大切なもの〉を失ったあなたに——喪失をのりこえるガイド』春秋社.)
- 大賀有記 (2014a) 「医療ソーシャルワーカーの役割のあいまい化からみる専門職性についての検討——役割理論と組織システム論の観点から」『社会福祉学評論』13, 57-68.
- 大賀有記 (2014b) 『ソーシャルワーク支援の発展的二重螺旋構造——役割喪失にともなう悲嘆作業過程の分析』相川書房.
- 小原真知子 (2012) 『要介護高齢者のアセスメント——退院援助のソーシャルワーク』相川書房.
- Parsons, T. (1951) *The Social System*, The Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- 坂田裕美子・石曾根雅之・市川統子ほか (2009) 「地域医療連携および退院支援業務におけるソーシャルワーカーの位置づけ——ソーシャルワーカーはどこへ行くのか」『医療社会福祉研究』17, 49-53.
- 白澤政和 (2010) 「第2章 相談援助の構造と機能」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座7 相談援助の理論と方法I 第2版』中央法規, 27-51.
- 田畑治・石牧良浩・辻貴文ほか (2006) 「修士修了直後、ならびに臨床心理士資格取得後の研修、スーパービジョン等についての追跡的研究(3)」『愛知学院大学心身科学部紀要』第2号増刊号, 15-26.
- 田中千枝子 (2014) 『保健医療ソーシャルワーク論 第2版』勁草書房.
- 山口みほ・浅野正嗣 (2008) 「職場外スーパービジョンの試み」『日本福祉大学社会福祉論集』119, 159-192.
- 山下祐介 (1997) 「第3章 ミードの科学方法論」船津衛編『G. H. ミードの世界——ミード研究の最前線』恒星社厚生閣, 41-63.